

丁寧に使われ手入れされた町家たち



駅を降りて少し寂れたアーケードの商店街を抜けると、御所の古い街並みが見えてきます。一歩足を踏み入れた途端、視界が狭まり、空気が濃くなったように感じる。

狭い通りを歩くと、築百年以上の商家が断続的に現れます。一階が太い格子又は板張り、ツシ二階が漆喰塗りに虫籠窓。これが御所商家の伝統的な作りのようです。

町は生活の場としてしっかり機能しています。観光客向けの店舗、土産物屋や飲食店などは見当たりません。今井町や五條と同じです。

断続的に残る古い家屋は、それぞれ瓦の葺き替え、漆喰壁の塗替え、堅格子の再生等がされています。虫籠窓を覆う看板もなければ、アルミサッシも見当たりません。建物毎の保全修復はしっかりされていました。

住まい手の方々が、過去からそうしていたように、これからもずっと住まい続けるために、丁寧に使われ、細目に手入れされているようです。大和という地域の、歴史的蓄積の豊富さと継承維持の意識の高さに起因しているのかも知れません。

ただ、街全体としての保全修復活動は、まだ途についたばかりのようです。コンクリートの電柱、プレハブ住宅など、歴史的町並みにそぐわないものが目につきます。町に残った歴史的遺産を、まちづくりに活かしていくためには、町全体の協力体制がもう少し必要かも知れません。



本町通りと葛城山系

まちあるきの考古学



陣屋町と寺内町を起源とするまち

御所は奈良盆地の南西端に位置しています。

盆地を南北に貫く古来からの街道のひとつ、下街道。江戸時代には高野街道とよばれ、大和郡山から、吉野川(紀ノ川)沿いの五條に至る重要な街道でした。いまでは街道に沿う国道24号線がその役割を継いでいます。

下街道から東に向かって御所の町は広がっています。この地域の水を集めるのが葛城川。御所の町を貫通して北に流れ、15km先で大和川に合流しています。

御所は、室町末期から江戸初期にかけて、陣屋町と寺内町、ふたつの性格をもった町として成立しました。

街を貫通する葛城川の西側を「西御所」といい、関ヶ原の戦いで功のあった和歌山城主桑山重晴の次男元晴を藩祖とする御所藩一万二千石の陣屋町でした。

枳形、基盤目状の町割り、背割りの水路等、戦国末期の機能的な城下町の道路形態がいまも残っています。

東の町を「東御所」といい、浄土真宗本願寺派の円照寺御坊の寺内町として成立しました。

戦国時代、真宗門徒の勢力が強かった奈良盆地南部には、5つの有力な御坊がありました。今井(橿原市)、畝傍(橿原市)、高田(大和高田市)、田原本(田原本町)、そして御所(御所市)です。これらの御坊は、16世紀半ばには成立していたようで、この時代すでに、御所が地域の中心地だった証といえます。

せつかく残された、そして良好に保全修復された歴史的遺産を、街ぐるみで活かす取り組みが待たれると感じました。



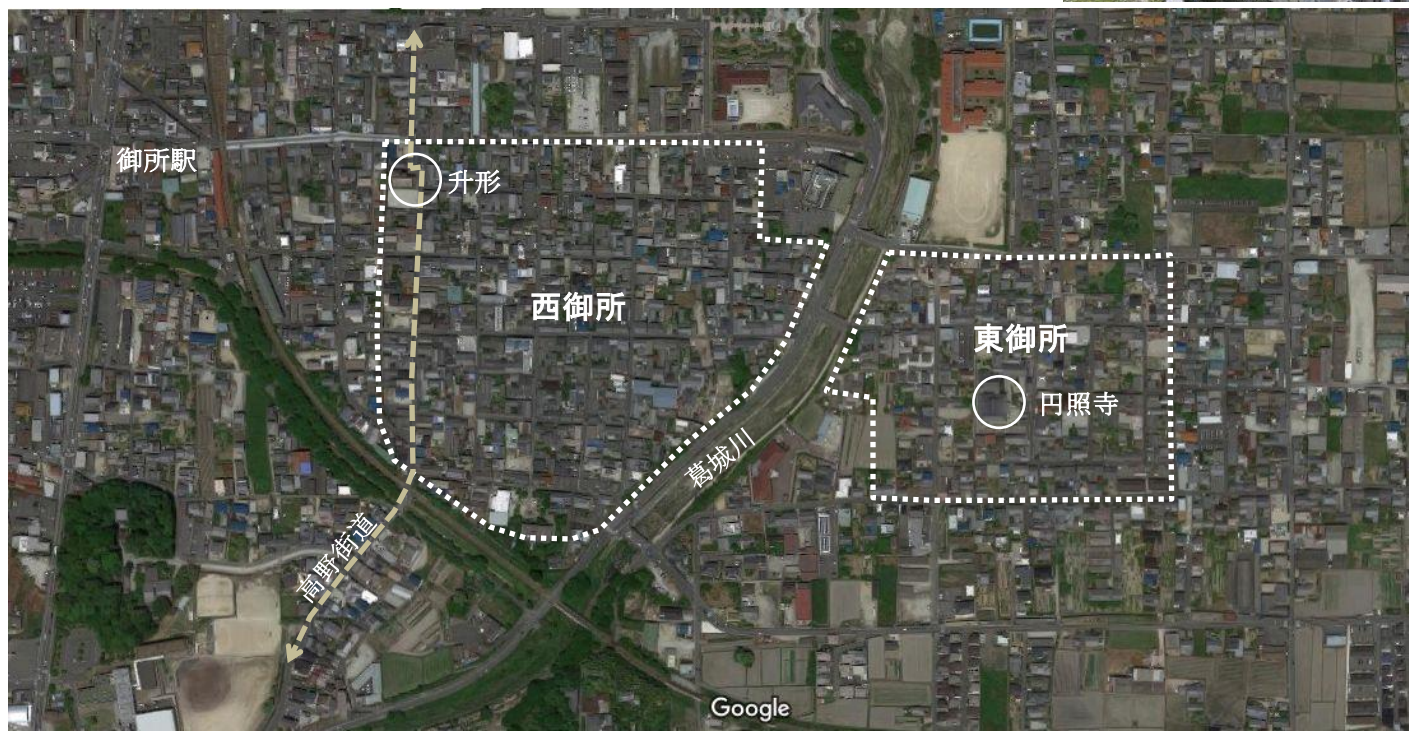
遠見遮断の枳形



背割り水路



近くのまちあるき
大和郡山 今井町 五條



Google